# ゴットフリート・ケラーとJ．フレーベルの「チューリヒ・ヴィンタートゥール文学社」
# -1846年の第一詩集の出版をめぐって-


| メタデータ | 言語: jpn |
| --- | --- |
| | 出版者: 明治大学教養論集刊行会 |
| | 公開日: 2020-11-27 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 田村, 久男 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/21231 |

明治大学教養論集　通巻547号
(2020・9) pp. 45-59

# ゴットフリート・ケラーとJ.フレーベルの「チューリヒ・ヴィンタートゥール文学社」
## ― 1846年の第一詩集の出版をめぐって ―

田　村　久　男

ゴットフリート・ケラー（1819-1890）は、1834年、教師に対する反抗事件にかかわったことで通っていたチューリヒの産業学校を退学処分になった。15歳になるかならずで勉学の道を断たれたケラーは画家をめざし、本格的に絵画の勉強をするために21歳でミュンヘンに留学したものの当初期待した成果は得られず2年あまりで滞在を打ち切って、1842年秋に半ば失意のうちにドイツから帰国する。なおもチューリヒでアトリエを構えながらも画家としての将来に迷っていたケラーは、たまたま手に取ったゲオルク・ヘルヴェークの詩集『生者の詩』に感動したことで見様見まねで詩作を試みる。そして最初にケラーの文学の才能を見出し、助言によって詩人としての成功を助けたのはドイツからの亡命者であったアウグスト・フォレンと同じくドイツ生れのユーリウス・フレーベルだった。ケラー自身、この経緯を次のように述べている。

> その頃〔＝ミュンヘンから帰郷した直後〕1843年の春に、何とはなしにほとんど生まれて初めてといっていい詩をいくつか書いてみたが、これは自分でも驚いたほど簡単にうまくいった。すぐに詩集を一冊出して、これで得た資金でミュンヘンに戻ろうという妙な考えが浮かんだ。夏から秋にかけて熱心に詩作にとりくんだ。当時起こった事件の

せいで政治についても意識するようになっていた。私以前にも多くの同胞たちがそうしていたように、書いた詩を一まとめにしてフォレン教授に送り、不安と期待をもって私の詩に見込みがあるかどうかの判断を仰いだ。というのもフォレン教授は、本人の意思に反して、我が国の詩人の卵たちにとっては預言者的存在となっていたからだ。送った詩のほとんどは駄作とされたが、残りのいくつかの詩は出来がよかったので、詩人の道を決断するようにと激励してくれた。すぐに何作かがまとめて冊子に印刷されて評判も悪くなく、いろいろと教えてくれる好意的な友人たちを得ることもできた。(1847年3月)[1)]

若き詩人ケラーのメントール役となったアウグスト・フォレン（August Adolf Ludwig Follen, 1794-1855）は、自身がドイツからの政治亡命者だったこともあり、チューリヒの彼の私邸は当時メッテルニヒ体制下で弾圧を受けて国外に逃れたドイツ人にとっての避難場所の一つとなっており、スイス国内も含めた革命家や自由主義改革者たちの主導的存在であった。

ギーセン生まれのフォレンは、兄カールとともにギーセン大学で愛国的ブルシェンシャフト（学生結社）運動に草創期から関わり、1814年にはナポレオンのフランス軍に対する解放戦争に義勇兵として参加し、ウィーン体制下の1919年、カールスバート決議により禁止されたブルシェンシャフトへの関与を理由に擾乱罪で逮捕拘束されて禁固10年の判決を受ける。保釈中の1821年にスイスのアーラウに逃亡、1824年からはチューリヒに移り、彼が住むアム・ゾネンビュール邸にはスイス在住の大学教授や改革を進める政治家、ドイツ各地からの亡命者たちが集まることになった。フォレンはスイス人富豪の娘との結婚で市民権を得て、チューリヒ評議会議員も務め、特に教育分野における近代化政策に様々な助言を与えた。例えば、1833年に設立されたばかりのチューリヒ大学の初代学長に、ヴァルトブルク祭にも関わり政治活動を理由に事実上ミュンヘン大学を追われた自然哲学者ローレン

ツ・オーケンを招聘したのもフォレンであり、[2] また革命思想ゆえにドイツから亡命した人々の支援にも努め、収監されていた牢獄から逃亡し1836年にアルザス経由でチューリヒに亡命した軍人で著述家のヴィルヘルム・シュルツ（Wilhelm Schulz, 1797-1860）とその妻カロリーネの市民権獲得に助力し、自由を歌う革命詩人ヘルヴェークやホフマン・フォン・ファラースレーベン、フェルディナント・フライリヒラートらにも滞在場所を提供した。フォレン邸に滞在していたファラースレーベンが最も早くケラーの才能に注目し、シュルツ夫妻はケラーの最初の詩集が出版された際に匿名でドイツの新聞や雑誌に好意的な書評を投稿しており、[3] 彼らフォレンサークルの多くはデビューしたての詩人ケラーの後援者となった。

ケラー以前に、フォレンの援助によって成功を収めた詩人にゲオルク・ヘルヴェーク（1817-1875）がいる。シュトゥットガルト出身のヘルヴェークは1839年に懲罰的軍役を逃れてスイスに亡命し、フォレンのもとに滞在中に自作の「生者の詩」（*Gedichte eines Lebendigen*）を朗読する。フォレン邸に出入りしていたユーリウス・フレーベルがこの作品に感銘を受け、1841年に設立したばかりの自分の出版社「チューリヒ・ヴィンタートゥール文学社」（Literarisches Comptoir Zürich und Winterthur, 以下「文学社」）で出版する。この処女詩集は大評判となり革命詩人ヘルヴェークの名前は一躍ドイツ中に知られ、上述のように画家ケラーが文学へと進路転換を決意するきっかけになったのもこの詩集あった。「ある朝、ベッドに寝ころんだままヘルヴェークの最初の詩集を開いて読んだ。斬新な響きはまるでトランペットの咆哮のように私の心をとらえた」[4] とケラーはその感動を表現している。

## J.フレーベルと「チューリヒ・ヴィンタートゥール文学社」の設立

当時、チューリヒ大学の鉱物学教授の職にあった地質学者ユーリウス・フレーベル（Julius Fröbel, 1805-1893）は、幼稚園の創始者として知られる教

育者フリードリヒ・フレーベルの甥にあたり、チューリンゲンのカイルハウで叔父の「一般ドイツ教育舎」で学んだ後、ミュンヘンやイェーナ大学で自然科学を研究、ベルリン大学のアレクサンダー・フォン・フンボルトの紹介により1833年にチューリヒに新設された産業学校に教師として赴任し（地理歴史の授業には当時在学中のケラーも出席）同時にチューリヒ大学でも講座を担当、1836年からは正教授となっていた。のち1848年にはフランクフルト国民会議の議員に選ばれ、同年ウィーンの十月蜂起に同僚のローベルト・ブルーム議員とともに参加して死刑判決を受けたほど（ブルームは処刑されるがフレーベルは恩赦により釈放）急進改革派の一人として積極的に政治に関わることになるが、ドイツからスイスに移った当初は政治にはほとんど関心がなく、彼自身は政治亡命者ではなかった。

当初、教育と研究のみに専念していたフレーベルが政治とかかわりを持つようになったのは、1839年の「シュトラウス騒動」をきっかけとする「チューリッヒ一揆」で、それまで政権を担っていた進歩派が後退し、新たに保守派による復古主義的な州政府が誕生したことにあった。

1830年、フランス七月革命はヨーロッパ各地に波及し、反動的なウィーン体制に反発する自由主義運動が高まる。ベルギーがオランダから独立を果たしポーランドやイタリアでも民衆蜂起が起こる一方、ドイツ連邦諸国では逆に官憲による言論弾圧が強まり、出版物の検閲が強化され、多くの政治亡命者が生まれることになった。スイスでは1833年のバーゼル分割によって、それまで事実上バーゼル市の支配地であった周辺地域が独立し、新たに生まれたバーゼル地方州では、市の代官に代わり、ドイツを逃れた行政官やテクノクラートらを積極的に採用して近代化を進める。このような自由主義的改革はプロテスタント州を中心に積極的に推し進められた。

チューリヒでも1831年に住民主権に基づき信仰や出版、商業の自由を定めた州憲法が初めて制定され、改革派市長コンラート・メルヒオール・ヒルツェル（市長在職1832～39年）により特に教育制度の近代化が実行され、

それまで教会の管轄であった学校が教会から分離され、教員養成学校も新たに作られる。1833年には新設チューリヒ大学を頂点に州立学校（ギムナジウム）、産業学校、国民学校等の新しい学校制度が整えられた。既に述べたように、これらの学校にはL.オーケンやW.シュルツ、J.フレーベルらドイツ人の学者や知識人が積極的に採用され、彼らの多くはフォレンサークルのメンバーとなり市長ヒルツェルをはじめとするスイス国内の進歩的政治家と交流を持った。

1839年、市長ヒルツェルはチューリヒ大学神学部の教授として、当時ヘーゲル左派の代表的人物として知られ、汎神論的な『イエスの生涯』の出版によって大きな議論を巻き起こしていた宗教哲学者ダーフィト・フリードリヒ・シュトラウスの招聘を提案する。この計画は教会を中心とする保守的な市民の間で激しい反発を招いて間もなく撤回されるが、特に教育分野でのあまりに斬新な改革に保守層の不満が爆発し、近代化に反感をもつ牧師に扇動された地方住民たちが武装して市内に押しかけ、死傷者が出る衝突事件となった（チューリヒ一揆 Züriputsch)。ヒルツェルは責任を取って市長を辞任し、新たに保守派政権が誕生し、閣僚の一人J. C.ブルンチュリのもとで反動色の強い政策が推し進められる。1845年に進歩派が復活する5年余りの比較的短い期間ながら、この間、世俗の教員養成学校は廃止され、出版・言論の自由の抑圧や、外国人亡命者の国内での活動制限が強められることになった。

J.フレーベルは政変により失脚した市長ヒルツェルの進歩的な自由主義思想に共感し、自らもその恩恵を受けていたこともあって、新たに現れた保守派の反動政策に強い危機感をもち、これに対抗する言論活動の必要性を感ずる。この目的のために1840年末、近隣のヴィンタートゥールで印刷所を営むU. R.ヘーグナーとともに「チューリヒ・ヴィンタートゥール文学社」を設立する。フレーベルの本来の目的はあくまでチューリヒにおける自由主義的改革を擁護し、当時の反動政策に対抗するための言論機関を作ることにあ

り、[5]「文学社」の社名も「政治プロパガンダの企図」を隠すためだったという。[6]　しかし出版第一号となった革命詩人ヘルヴェークの『生者の詩』がいきなり大評判となり、ドイツでも大きな注目を集めたために、検閲が厳しいドイツ国内では発表が難しい原稿や寄稿が殺到し、[7]当初の計画はドイツにも拡大されて「ドイツで目覚めた政治的精神を促すべく書かれた著作物を、検閲を迂回して印刷することで世間に広め、同時に、スイスで起こっている反動的風潮に文筆で対抗する」[8]ことが出版社の課題となった。この方針拡大は結果としてドイツでの販売禁止と国境での差押え、さらには編集方針をめぐり内部における仲違いもあって、出版社が短命に終わる原因ともなった。

1843年、A. A. L. フォレンと思想家アルノルト・ルーゲ、ヘルヴェークの妻エマの父親でベルリンの銀行家 J. G. ジークムントらが共同出資する形で経営強化され、ヘルヴェークに続いてホフマン・フォン・ファラースレーベンやローベルト・プルッツの詩と戯曲、思想家 D. F. シュトラウス（『イエスの生涯』簡略普及版）やブルーノ・バウアー、ルートヴィヒ・フォイエルバッハらの著作が相次いで出版された。新聞・雑誌では、ドイツ人亡命者ルートヴィヒ・スネルによって発行されていたリベラル派の代表的な機関紙「スイス共和新聞」（発行元はフォレン）の編集を引き継ぎ、パリでルーゲと若きマルクスによって共同編集された「独仏年誌」にも発刊資金を提供する。1842年、ヘルヴェークを責任編集者としてドイツに向けた月刊誌「スイスからのドイツ便」が企画され、ヘルヴェーク自身が寄稿者を募るためにドイツを巡り、ベルリンではプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世にも謁見するが、拝謁直後に発禁令が出てヘルヴェークも国外追放となり計画は頓挫、代わりに出版された評論集は当局にすべて押収されることとなった。「スイス共和新聞」も反動的なブルンチュリの圧力を受けて半年余りで手放さざるを得ず、[9]パリの「独仏年誌」も結局は1844年に一度限りの合併号の発行で終了する。

## ケラーの詩人デビュー

ヘルヴェークに刺激されて我流で試みた詩作の可否を確認すべく、ケラーが最初に接触したのはかつての産業学校時代の恩師フレーベルだった。1843年8月、書き溜めた詩の中から21篇を選んでフレーベルに送り鑑定を依頼する。フレーベルからは激励を込めた好意的な手紙が届き、バーゼルの作家エマヌエル・シャイブに紹介する一方で、学生歌の編纂者で韻律に詳しいフォレンの判断を仰ぐようにとケラーに助言する。翌年の秋にケラーは改めてフォレンのもとに原稿を送り、冒頭のケラー自身の回想通り、そのうち何作かがフォレンの眼にとまる。[10] フォレンの助言と指導のもとに、1845年「ある独学者の詩」が「文学社」の文芸誌「ドイツ文庫」に、さらに翌年「恋愛詩」と「炎の牧歌」の二つの連作詩が印刷された。フレーベルやフォレンがケラーに期待したのは、当時スイスで人気のあったアブラハム・エマヌエル・フレーリヒやイェレミアス・ゴットヘルフら牧師系の保守的な作家に対抗できる、リベラルな思想を持った新しいスイス詩人の登場であったというが、既にこの時期「文学社」内部では意見の対立が表面化しており、まもなくフォレンが資金を引き揚げたこともあって経営危機に陥り、そのためケラーの最初の『詩集』はフォレンと親しいハイデルベルクのC. F. ヴィンター書店から出版されることになった。

「文学社」の内部対立は、しばしば揶揄を込めて「チューリヒ無神論論争」(Zürcher Atheismusstreit) と呼ばれており、出版社にとどまらずフォレンサークルを中心としたチューリヒのドイツ人亡命者グループを分裂させることになった。きっかけはフォレンとともに「文学社」の共同経営者となっていたアルノルト・ルーゲ (1802-1880) で、ヘーゲル左派の最も重要な機関紙「ハレ年誌」の編集者であったルーゲは、プロイセンの圧力により機関紙の発行が困難となった後パリに移住し、マルクスとともに編集に携わった「独仏年誌」の発行停止後にチューリヒにやって来る。1846年に発表した回

想録『パリの二年間』の中でスイスにおける愛国主義と素朴な信仰を批判し、神の不死性を否定する。ルーゲのスイス移住にも助力したフォレンは、これを自分に対する当てこすりと感じて即座にルーゲを批判する風刺ソネットを発表し、無神論者は神を冒涜することで自らを神格化し自己満足に耽っていると難じる。これに対して、さらにルーゲもフォレンの詩のパロディを作って無神論こそが真の自由の前提であると主張する。

同時期にチューリヒ滞在していた作家カール・ハインツェンとともにフレーベルもルーゲの主張を支持し、一方、無神論を批判し神の不死性を擁護するフォレン側には旧友ヴィルヘルム・シュルツやF. フライリヒラートらが味方し、お互いパンフレットや新聞紙上で批判合戦を繰り広げ、果ては揶揄と罵倒と誹謗の応酬となり、かつてフォレンとともにチューリヒ一揆の混乱を避けて一時バーデンに避難したことを「臆病」とからかわれたシュルツが、軍人としての名誉を守るためにケラーを立会人にしてルーゲに決闘を申し込むまでに発展する。

この「論争」には、ともに自由を求めドイツにおける国民統合を目指しながらも、信仰の問題において世代間の違いが表れたとみることができる。フォレンやシュルツはロマン主義が隆盛だった18世紀末に生まれて反ナポレオン解放戦争を経験しており、一方、政治的傾向の強いヘーゲル左派のルーゲやフレーベルが政治活動を始めたのはウィーン会議以降のメッテルニヒ体制下であった。さらに若いケラーの場合は、恩師フォレンの影響が強く、まだ当時は神への信仰こそが詩作の根源であると信じていた。『詩集』の中に「我もイヒェルに」（*Auch an die „Ichel"*）と題した4篇のソネットがある。Ichelとは、フォレンが自作のソネットでドイツ人Michelと韻を合わせて作った言葉で無神論者を意味し、そこでケラーは神の存在を擁護しつつ、ルーゲらの無神論を次のように批判する。

私の心が墓の彼方に憧れるのは、

利己心でも虚栄心でもない。
嶮しい両岸を渡す懸け橋となる
誇りであり、私を塵埃から解放する。

緑なす地上の時ははかなく、
精神をゆり動かすものは永遠だ。
お前たちが胸に抱くものはごくわずかで、
どれほどこの世で楽しもうがやがて飽きる。
〔中略〕
詩人が、不死の考えに浸れば
墓の先に目を向けようとは思わない。
陶酔の中に詩人がつくる歌の見事さ。
お前たちに正義の証など何ひとつない。

そして末尾は、

しかしながら職業的無神論者は
無神論という骨だけで生きており、
その身にまとっているのは冒瀆である。[11)]

と締めくくる。批判された側のルーゲもハインツェンも、詩人ケラーの才能はそれなりに高く評価しており、ハインツェンはケラーの詩集が出版された直後に次のように述べる。

ブルシェン皇帝〔= A. A. L. フォレンのこと〕が戦場から撤退した後、新たに彼が育てた旗持小姓で、才能と信念をもったチューリヒの詩人ケラーが出てきて、自分の詩集（ハイデルベルク、ヴィンター書店）

でIchelに立ち向かってきた。若いケラーにはまだ自分に足りない精神的教養を育むもっといい機会があるはずなのに、疑わしい人物の手先となって、自分では何も判断しようとせずに、脆弱な教義を振り回しているのは残念だ。[12)]

二年後にはケラーもハイデルベルクで、それまで攻撃対象の一人だった唯物論者フォイエルバッハと知り合い、彼との交友を通して無神論（もしくは理神論）へ転向し、これこそが真の創作の基盤であるとの確信にいたる。

## 若きケラーと政治詩

ケラーの名前で発表された最初の詩は「イェズス会士の歌」で、ケラーが直接フォレンと連絡を取る前の1844年の初めに、フレーベルの紹介によってバーゼルの「自由スイス」紙の別刷付録として印刷された（E.シャイプ編集、印刷はフレーベルの「文学社」）。この詩は、当時、カトリック州の一つであったルツェルンの保守政府が州の教育を全面的にイェズス教団に委ねた決定に抗議して書かれたもので、ルツェルン政府打倒のために遠征した義勇軍にケラー自身も二度にわたって参加している。この付録版には有名画家マルティン・ディステリの挿絵が添えられており、ほぼこのデザインのまま政治ビラとして印刷され、リズミカルなリフレインや擬音を使い、内容的にも比較的単純で明確なメッセージ性をもった詩だったこともあって広く拡散し、これにより革新政治詩人ケラーの名前はスイス中で知られるようになった。

フォレンの指導の下に「ドイツ文庫」に印刷された一連の詩と、これらをもとに篇数をほぼ三倍に増やした第一詩集（1846年）は多くの場合、表題の変更も含め大幅な加筆がなされ、その結果「若きケラーの詩ではなく、アードルフ・ルートヴィヒ・フォレンの詩」[13)] というべきものとなり、特に時事問題を扱った作品ではフォレンの加筆によってプロパガンダ的効果がよ

り一層強められている。「イェズス会士の歌」では本文自体は軽微な語句の修正にとどまるものの、本来の表題*Jesuitenlied*（「自由スイス」紙の付録版は「彼ら、イェズス会士がやってきた」*Sie kommen, die Jesuiten*）から、『詩集』では、フォレンによって「ロヨラの勇猛で大胆な狩」（*Loyola's wilde, verwegene Jagd*）へと大きく変更される。

ロヨラの勇猛で大胆な狩
　幻影にあらず

さあさあ、狩りが始まった。
小大の男たちが騎馬でやって来た。
飛び跳ねては、すぐさま転がり
絶えず悲鳴が上がり、泣き叫ぶ。
彼ら、イェズス会士がやってきた。

乗馬の列は長く続き、
後ろには悪竜や豚に跨った者もいる。
なんと賑やかな者たちだ。
母親のお腹の中の赤子も怯えているにちがいない。
彼ら、イェズス会士がやってきた。

ざわざわと押しかけ、ひしめき、忍び寄る。
まるで地獄のようなひどい悪臭、
さあ、安穏よ、おしまいだ。
グレーテ、行って窓を閉めなさい。
彼ら、イェズス会士がやってきた。

十字架と旗に先導され
後ろに括り付けてあるのは施物の袋だ。
狂信は審問官となり
愚昧は乞食の一群となって列に連なる。
彼ら、イェズス会士がやってきた。

おお、スイス、美しき花嫁よ、
お前は悪魔に嫁がされた。
そう、泣くがいい、哀れな子よ、
ゴットハルト峠から悪い風が吹く。
彼ら、イェズス会士がやってきた。[14]

この表題は、フォレン自身が学生として参加した解放戦争で、義勇部隊を率いてドイツ統一の象徴ともなったリュッツォウ将軍を歌ったテオドール・ケルナーの詩「リュッツォウの猛き狩」（*Lützows wilde Jagd*）をイェズス会の設立者で反宗教改革の代表的人物イグナチウス・ロヨラに替えたもので、副題に「幻影にあらず」（Keine Vision）とあるが歴史上の人物に関連付けられ、ドイツの解放戦争も想起されるために対象がぼけてしまい、本来この詩が持っていたアクチュアリティは逆に弱まっている。後にケラーはこれらのフォレンの加筆を嘆き、1883年の『全詩集』では一部削除や修正を行う。

既に作家としての名声を獲得した58歳のケラーは、雑誌に発表した自伝的回想の中で、この最初の詩について次のようなエピソードを紹介している。

新聞に印刷された最初の作品はイェズス会士の歌で、これについてはひどい目にあった。新聞が届いたとき女たちは驚き、部屋に居合わせた保守的な隣家の女性はこの不快な詩を読み上げると、唾を吐きつけ

て逃げるように立ち去った。他にも選挙戦で勝った時の勝利の歌や不利な出来事への悲嘆、民衆集会の呼びかけ、敵対党の指導者への誹謗、等々でも似たようなことが起こった。私がたちまちに味方や支援者、そしてある程度の名声を獲得することになったのは、私が書いたこの種の粗暴な詩のおかげだったことは残念ながら否定はできない。

しかし、私の目を覚まし、人生の方向を決定づけてくれたのが、当時の生の時代の要請だったことを、今日でも嘆く気持ちはない。(1877年1月)[15]

チューリヒでは1845年の選挙の結果、再び改革派が多数を占め、ヨナス・フラーを首班とする革新政権が復活する。フラーは「シュトラウス騒動」でもD. F. シュトラウスのチューリヒ大学招聘に賛同した進歩派の政治家で、1848年に成立したスイス連邦の初代大統領にえらばれる。同年秋、ケラーはチューリヒ大学の教授で神学者フェルディナント・ヒッツィヒや化学者カール・レーヴィヒらの働きかけで州政府から奨学金を得て再びドイツに赴く。ヒッツィヒもレーヴィヒもともにドイツ出身で、フォレンのサークルでケラーの有力な支援者であった。ケラーはまずはハイデルベルクで、チューリヒ大学にいたときから親交のあった病理学者ヤーコプ・ヘンレの講義に参加し、上述のようにフォイエルバッハとの議論を通じて唯物論に転向する。まもなくベルリンに移り、ベルリンでは『詩集』が名刺代わりとなって作家ファルンハーゲン・フォン・エンゼとその姪ルートミラ・アッシング、ファニー・レーヴァルト、ベッティーナ・フォン・アルニムらの文芸サロンに出入りする。ケラーのドイツ滞在は足掛け8年にも及び、その間金銭的困窮に苦しみながらも代表作『緑のハインリヒ』や短編集『ゼルトヴィラの人々Ⅰ』を書き上げ、小説家として名が知られることになった。

ケラーの小説は、強い風刺を交えながら一般民衆の生活をユーモアと愛情をこめて描写しており、特定の時代にとらわれない、その意味で古典的な作

風といえる。後にチューリヒ市の筆頭書記という公職に就任したこともあり、青年期の過激とも見える変革思想とは対照的に、反動とまでは言えないにしても社会の急速な近代化に対しては批判的な距離を保ち続ける。ケラー研究者のB. ブライテンブルッフは、若きケラーのラディカリズムはもともとは自分自身への憤懣から来たもので、画家としての挫折感と将来が見えぬ鬱屈とした気分の中で革命詩人ヘルヴェークという「模範」を得て、当時たまたま重なったスイスの抑圧的反動主義への攻撃という形をとったと解釈する。[16]　そしてその際に彼の「粗暴な」衝動を詩作へと導き、詩人としての成功を助けたのが、亡命者フォレンのサークルやフレーベルの「文学社」に集まった自由主義的知識人たちだったのである。

## 注

1) Historisch-Kritische Gottfried Keller-Ausgabe [HKKA], Bd.15, Zürich 2012, S.399. [1847 Indirekt überlieferte frühe Autobiographie]. 訳出にあたっては『ケラー作品集第5巻』（松籟社 1989年）収録、中埜芳之訳「自伝」を参考にした。
2) Alexander Ecker: *Lorenz Oken. Eine biographische Skizze*, Stuttgart 1880, S. 34 u. S. 97.
3) Gottfried Keller : *Gedichte*, hrsg. v. Kai Kauffmann (Gottfried Keller : Sämtliche Werke in sieben Bänden, Bd.1, Deutscher Klassiker Verlag), Frankfurt a. M. 1995, S.865f. [Kommentar von K. Kauffmann]
4) HKKA, Bd.15, S. 411. [Autobiographisches II]
5) もともと予定していた機関紙名は「国家と教会、学校、生活における民衆教育向上のための月刊誌」（Monatliche Blätter zur Beförderung höherer Volksbildung in Staat, Kirche, Schule und Leben）であったという。Katharina G. Schneider: *„Wege in das gelobte Land" Politische Bildung und Erziehung in Vormärz, Regeneration und Deutscher Revolution 1848/49*, Bad Heilbrunn 2016, S. 74. シュナイダーは従来の研究で見逃されてきた、本来の目的であったチューリヒ限定ローカル言論誌としての性格を強調している。
6) Julius Fröbel: *Ein Lebenslauf. Aufzeichnungen, Erinnerungen und Bekenntnisse*. Stuttgart 1890, Bd. I. S.96. もともとヘーグナーの印刷所兼書店の名前が Literarisches Comptoir in Winterthur であり、これにチューリヒを加えてそのまま残した。

7) ケラーと同年の作家テオドール・フォンターネも青年期に「文芸社」に原稿を送ったという。Werner Näf: *Das Literarische Comptoir Zürich und Winterthur*, Bern 1929, S.14.「文芸社」の歴史についてはこの W. Näf と以下の H. G. Keller の研究に基づく。

8) W. Näf, S. 95.

9) Hans Gustav Keller: *Die politischen Verlagsanstalten und Druckereien in der Schweiz 1840-1848*, Bern u. Leipzig 1935, S.59.

10) たまたまフォレン邸に滞在していて原稿を目にしたホフマン・フォン・ファラースレーベンがフォレンに推薦したという。Emil Ermatinger: *Gottfried Kellers Leben*, Zürich 1950, S.127.

11) HKKA, Bd.13 (Frühe Gedichtsammlungen), S.56. [Sonette XXIII, XXIV.]

12) Karl Heinzen: *Politische und Unpolitische Fahrten und Abenteuer* II, 320ff. (E. Ermatinger, S. 152 から引用)

13) Gottfried Keller. Sämtliche Werke, hrsg. v. Jonas Fränkel, Bd.14, Bern u. Leipzig 1936 (*Gedichte 1846*), S.XXV [Einleitung von J. Fränkel]

14) HKKA, Bd.13, S.118f.

15) HKKA, Bd.15, S.412.

16) Bernd Breitenbruch: *Gottfried Keller in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*, Reinbek bei Hamburg 1968, S.32.

（たむら・ひさお　政治経済学部教授）